

# ディベート授業で学習者は何を求めているのか —— 学習者の振り返りから見た今後の修整点の発見 ——

## What Do Learners Expect in a Classroom Debate? : Developing a Curriculum for Classroom Debates Based on the Retrospection of Learners

長谷川 孝子  
HASEGAWA Takako

### 〔要旨〕

本稿は日本語中級後半レベルの聴解会話クラスで行われたディベート授業の実践と学習者の振り返りを調査した報告である。聴解会話クラスでは1つの項目としてディベートが行われている。ディベートにおける効果的な学習のために、実現可能で具体的な学習目標をたてて授業を行った。ディベート本番では、学習者が目標を達成している様子が観察された。しかし、授業後の学習者の振り返りからは「よかった、やりたい、やったほうがいいと思われるもの」として「会話」が挙げられ、その対極のやりたくないものとして「ディベート」が挙げられた。振り返りのコメントを詳細に分析すると、学習者の満足度へ繋げるには「目標達成」だけではなく、「学習者の期待」と「目標」の合致が重要であることが想起された。最後に、「学習者の期待」として彼らが求めている「運用力」をつけるための、学習者のレベルに合ったディベート授業の新たな提案も行う。

**Key word:** ディベート、授業の目標、目標達成、満足度、期待



## 1. はじめに 本報告の目的

本報告は、2018年度春学期、立教大学日本語教育センター「聴解会話（中級後半）」の授業で行ったディベートについての実践報告である。

当該授業は、立教大学日本語センターで決められたカリキュラムに従って行われるものであり、授業で行うべき項目と主な使用教材が決められている。「聴解会話」の授業は聴解と口語表現と大きく2つに分けられ、聴解と口語表現の内容はさらに細かく分けられている。担当講師はその内容に沿ったかたちで、各項目の進め方などの詳細を考えている。聴解の項目は①会話の理解、②ニュースの理解、③発表やディベート内容の理解となっており、口頭表現に関する項目は①短いスピーチ、②会話、③パワーポイントを使った発表、④ディベート、となっていた。本報告では、この中のディベートに絞って、学習者の振り返りのコメントから今後の修整点の発見とその考察をすることを目的とする。まず、ディベート授業の概要と目標、授業の流れを紹介し、次に、学習者の授業の振り返りについての結果をまとめる。その後、学習者の授業に対するコメントから修整点を探り、今後の授業への課題を考える。

## 2. 調査の概要

### 2.1. 調査対象のディベート授業

#### 2.1.1. ディベート授業の概要と使用教材

2018年度春学期聴解会話授業は週に1回90分の授業で、一学期間計14回行われた。筆者が担当したクラスの学習者は、全員大学へ正規入学をした学部生で、必修の授業であった。クラス人数は学期初め22名だったが、ディベート前までに3名の離脱者がいたため、ディベート開始時は19名で行った。ディベートは19名を3～4人のチームに分けた。ディベートのチーム分けと対決するチームは、学生の個性や能力などを考えながら教師が決定し、3人のチームが5つ、4人のチームが1つとなった。肯定側1チームと否定側1チームで1グループとし、合計6チーム、3グループが本番のディベートに向け準備を開始した。しかし、1名ディベートの本番に出席せず離脱となったため、最終的にディベートを行った人数は18名だった。ディベートの論題はグループごとに興味のあるものを選んだ。ディベートは学期の最終の課題となっており、ディベート本番は口頭表現の期末試験にもなっていた。ディベート授業に当てられる時間は以下のとおりである。主な教材として『知のナビゲーター』からの抜粋を適宜使用した。

#### ディベートに当てられる時間

1日目 ディベート授業の流れを確認

(他の課題である口頭発表終了後に確認)

2日目 チーム分け、対決するチーム決定、論題決定

- ディベート準備 主張と根拠についてチームでディスカッションする
- 3日目 ディベート準備 ディベートの流れに沿って内容をチーム内でディスカッションする
- 4日目 期末試験 ディベート本番 ディベート2グループ実施
- 5日目 期末試験 ディベート本番 ディベート1グループ実施

## 2.1.2. ディベートの目標

ディベート授業は日本語センターのコース概要に沿って、筆者がさらに細かい目標を設定し、授業を行った。その際、Richards（2001）の既存研究を基に目標を設定した。

Richards（2001）は『Curriculum development in language teaching』の中で、第二言語／外国語を効果的に教えるためのカリキュラム設計や運営の方法を提案している。カリキュラムの内容を決定する際には、①ニーズ分析、②状況分析、③具体的な目標設定、が必要であることが述べられている。学習者や教育機関などのニーズ分析と状況分析を基に、明確な目標を決定し、カリキュラムの詳細を決めるのである。具体的には、まず、学習者が何を望んでいるのかという学習者のニーズを理解し、それとともにコースに関わる教師や教育機関のニーズにも照らし合わせて最終的なニーズ、つまり、学習者が必要とする能力を決定する。同時に、学習が行われる状況を注意深く観察し、カリキュラムに影響を与える要素を分析する。例えば、カリキュラムにどれだけの時間が当てられるか、教師が求められた教授法を実行できるか、学習者モチベーションや期待度はどのくらいか、学習者が学習に当てられる時間は十分か、などが挙げられるだろう。これらのニーズ分析と状況分析のあと、明確かつ実行可能な目標を決定していくことが効果的なカリキュラム設計のために重要になる。

本報告では、ニーズ分析や状況分析は事前調査として行う時間がなかったため、学習者のそれまでの学習成果、学習者へのヒアリング、授業の中での観察から行った。以下に、教育機関のニーズと状況、学習者のニーズと状況、それらを踏まえて最終的に判断した目標を示す。Richards（2001）では、授業の一般目標を「goal/aim」、さらに細分化した目標を「objectives」としているが、本稿ではカリキュラム概要を「ディベート授業の最終目標（goal/aim）」、細分化した目標を「行動目標（objectives）」とする。

教育機関のニーズ：

1. ディベートの導入、準備、実施をする
2. ディベート本番を期末試験とする
3. 他の課題である、「短いスピーチ」、「会話」、「発表」の時間を確保した上でディベートの時間を確保する

教育機関の状況：

1. 準備に当てられる日は2日半、試験は2日間に分けて行う。

学習者のニーズ：

1. ディベート形式の理解と経験
2. 資料を根拠にした主張の経験と習得
3. チームで協力しながら、反論をする経験

学習者の状況：

1. 18名中、ディベート経験者3名（クラス内で経験者を聞いたところ手を挙げた人数）
2. 口頭表現能力は自分の意見を準備する時間があった上で、それを話せるというレベル
3. 学部生のため、授業外での準備時間は十分でない可能性がある
4. ディベートのチームは必ずしも面識ある者同士ではない

ディベート授業の最終目標（goal / aim）：

ディベート形式の理解、経験を最終的な目標とする。ディベート本番では、根拠を示しながら主張をすること、自分の主張を分かりやすく伝えることを目指す。また、相手側の主張や反論を事前に推測、準備し、本番ではチーム内で協力して反論できるようにする。ディベート内で必要な日本語表現を理解し使用できるようにする。

行動目標（objectives）：

1. DVD 視聴とハンドアウトでディベート形式を理解する
2. 資料検索方法の理解をし、論題に沿った資料が集められる
3. ディベートの構成に沿って、情報を整理することができる
4. 整理した情報を基に、根拠を示しながら主張ができる
5. 整理した情報を基に、相手側にどんな反論があるか理解できる
6. 準備をした情報を基に相手側の主張への反論内容を考え、チームで協力して反論することができる
7. 主張と反論で使用する日本語表現を理解し、使用することができる

### 2.1.3. ディベート授業の流れ

「ディベート授業の最終目標（goal/aim）」と詳細な目標である「行動目標（objectives）」を決定後、これらを基に授業の流れを決定した。以下に、ディベート授業の流れを挙げる。学習者が選択した論題は『知のナビゲーター』を参考にしている。

ディベート授業の流れ：

〈ディベート準備1日目〉（他の課題である口頭発表終了後）

- ①次週からのディベート準備と本番の流れを理解する

〈ディベート準備 2 日目〉

- ② DVD とハンドアウトでディベートの流れを理解する
- ③ 3-4 人のチームと、対決するチームの組み合わせを教師から発表後、興味のある論題、肯定側と否定側を決定する
- ④ チームで主張と根拠を考える
- ⑤ チームで作業分担をする
- ⑥ 論題についての不足部分を資料で調べる

〈ディベート準備 3 日目〉

- ⑦ チームで、調べた内容を話し合う
- ⑧ ディベートの流れに沿って、肯定と否定意見を考える
- ⑨ 自分たちの主張と根拠を決定する
- ⑩ 予想される批判／その反論を決定する
- ⑪ 相手側の主張を推測し、自分たちの反論を決定する
- ⑫ 本番での担当箇所を決定する
- ⑬ 日本語表現例を見て準備練習をする

〈ディベート本番 1 日目〉 2 グループのディベートを行う

論題「監視カメラを増やすべきか」

- ⑭ 司会、タイムキーパー、ジャッジを分担、それぞれ役割をこなす
- ⑮ チームに分かれて、ディベートをする
- ⑯ ジャッジはジャッジシートに沿ってディベートを審査する（点数化する）
- ⑰ ジャッジが審査した点数から、勝敗を決める
- ⑱ ディベート後、ディベーターはセルフチェックシート（自己評価、反省と感想）を書き提出する
- ⑲ ジャッジはジャッジシートを提出する

論題「原子力発電所は必要か」 ⑭～⑲をもう一度繰り返す

〈ディベート本番 2 日目〉 1 グループのディベートを行う

論題「死刑制度を廃止すべきか」 ⑭～⑲を行う

## 2.2. 調査協力者

調査の対象者は「聴解会話」授業を履修した学習者である。コース終了後、2.3. で述べる「授業全体のふり返りアンケート」を実施したのだが、さらにその後、文書と口頭で調査内容の説明を行い、調査に学習者の授業内の活動記録などが必要であることを伝え協力を募った。学習者のアンケート結果と授業内の活動記録を研究に使用することに同意してもらえる場合に、同意書に署名してもらった。今後の授業のために調査が必要なこと、個人が特定されないようにすること、

また、協力は任意であり成績には影響しないので難しい場合は署名をせずに提出するように伝えた。調査協力者は、自発的に同意書の提出があった17名である。

### 2.3. データと分析方法

学習者が授業で何を求めているのかを知るために、学習者のふり返しから分析を行う。主な使用データは2種類である。1つ目は、(1)「授業全体のふり返しアンケート」、2つ目は(2)「会話とディベートのふり返し」である。(1)は、コース全体でよかったと思う項目、よくなかったと思う項目について質問をしたものである。(2)は会話とディベート終了後に学習者が行った学習のふり返しである。学習者には、何ができて何ができなかったかなどを書いて提出してもらった。(1)はコース終了後、(2)は会話授業の終了後とディベート終了後に全員に記入してもらった。本調査では、これら全員のデータの中から研究への使用許諾を得た学習者のデータを調査に使用している。この2種類のデータを、2.1. で述べた授業内容、現場教師の視点も加えて、多角的に考察する。

分析は2段階に分けて行う。まず、第1段階として、(1)「授業全体のふり返しアンケート」から、授業で「よかった、やりたい、やったほうがいいと思うもの」、「よくなかった、やりたくない、やらないほうがいいと思うもの」で回答が多かった項目の結果をまとめる。その後、「よかった、やりたい、やったほうがいいと思うもの」としての回答が多かった「会話」、「よくなかった、やりたくない、やらないほうがいいと思うもの」としての回答が多かった「ディベート」についての詳細を分析するため、(1)「授業全体のふり返しアンケート」と(2)「会話とディベートのふり返し」の中の学習者のコメントを考察する。

## 3. 結果

### 3.1. 授業全体のふり返しアンケートと項目別のふり返りのまとめ

#### 3.1.1. 授業全体のふり返しアンケートの結果

学習者のアンケート結果と授業内の活動記録などを研究に使用することについての同意書を提出した17名の回答の集計と詳細を「3.1.1. 授業全体のふり返しアンケートの結果」、「3.1.2. 会話とディベートのふり返りの結果」としてまとめた。今後の授業の改善に繋げるため、本当の気持ちを書いてほしいことを伝え、名前は無記名でも可とした。複数回答可としている。まず、授業全体のふり返しアンケートから、「よかった、やりたい、やったほうがいいと思うもの」と「その理由」、次に、「よくなかった、やりたくない、やらないほうがいいと思うもの」と「その理由」を示す。

#### 【授業全体のふり返しアンケートの結果】

質問1：よかった、やりたい、やったほうがいいと思うのはどんなことですか。

1. 会話……11名
2. 発表……4名
3. スピーチ……2名
4. ディベート……1名
5. ニュースの聴解・・2名
6. 空欄……1名

「会話」がよかった、やりたい、やったほうがいいと思う理由：

(コメント記入者6名 学習者の回答の表記のまま)

1. 会話や発表など話す練習はよかったと思います。  
やりたくなくても実際やってみるとやってみてよかったと、思いますので。
2. 日常生活に関する会話をやりたいと思います。
3. 日常生活で使われる会話はよかったです。
4. 友達の話し方や今後就職するとき上司との間の話し方をやりたい。
5. 会話の練習がよかったと思います。一番苦手な文末表現を練習できたからです。
6. 会話で発音など練習できる。

質問2：よくなかった、やりたくない、やらないほうがいいと思うのはどんなことですか。

1. ディベート……6名
2. 短いスピーチ……3名
3. 特になし……3名
4. 話すこと全般……1名
5. ニュースの前の授業（スピーチと会話の一部だと考えられる）……1名
6. 空欄……2名

「ディベート」がやりたくない理由：

(コメント記入者5名 学習者の回答の表記のまま)

1. ほかの専門科目の課題は多くて、ディベートの準備も時間かかるから、ちょっとやりたくないと思う。
2. 私達の日本語力に役立つと思うけど、よくないとは言えないけど難しく感じる。
3. 現段階で自分の考えを表すのに精いっぱいなのに、論理的にディベートすることはまだ早いです。つまり、レディネス待ちが必要と思います。
4. グループの人と意見をそろえることはちょっと時間がかかる。他の人と相談することはちょっと大変で、そろえて練習機会も少ない。
5. 資料を読むだけでは日本語能力を伸ばせないと思います。

### 3.1.2. 会話とディベートのふり返りの結果

次に、授業全体のふり返りの中で、「よかった、やりたい、やったほうがいいと思うもの」で

回答が多かった「会話」と、「よくなかった、やりたくない、やらないほうがいいと思うもの」で回答が多かった「ディベート」の学習者のふり返りをまとめる。学生からの評価が高かった会話授業はテキスト『生きた会話を学ぶ中級から上級への日本語なりきりリスニング』のL6「旅する楽しみ」、L7「会社のお話を聞く」、L4「結婚のお祝い」から抜粋して授業を行っている。各課の流れは、①会話の聞き取り、②そこで使われる表現や会話の流れの確認、③会話練習、④発表またはロールプレイという流れである。

以下、会話に関してはふり返りの中で「できたところ」と「次にできるようになりたいこと」への回答、ディベートに関しては「ディベート目標の達成度に関する質問」と「反省と感想」への回答をまとめる。なお、会話では調査対象者の1名が欠席していたため、16名の回答の結果である。A～Pは調査協力者16名を表す。

### 【会話のふり返りの結果】

#### 会話：「できたところ」への回答

会話のふり返りで「できたところ」の回答を見ると、「会話全般がうまくできた」と感じた学習者が多い。それに次いで、「授業の目標部分達成」に関するコメントも見られた。コメントを書いていなかった学習者は1名であった。分かりにくい部分は（ ）内に筆者が補足として加えた。

(学習者の回答の表記のまま抜粋)

#### 〈会話全般がうまくできた〉

- A 3分以上の対話ができる。
- B 一応怯えずにちゃんと話したところだと思います。
- C 会話をスムーズに進めました。
- D 緊張しても、完成した。
- G 日常会話ほど簡単に話すこと。
- H ほぼできました。
- I 会話を順調にすること。
- J 話したいこと大体話した。
- K 会話を覚えて、終わりまでできた。
- M 言いたいことはすべて言いました。
- N ちゃんと自分のおもいを言葉に転換すること。

#### 〈授業の目標が達成できた〉

- E 口癖がよく出来た。(確認しながら会話を進めることだと思われる)
- F できるだけ詳しく紹介したこと。
- L オウム返しで話題を広げる?(確認しながら会話を進めることだと思われる)
- P 内容の確認ができた。



(相手の話の内容の確認をしながら会話を進めることだと思われる)

〈回答なし〉

○ 空欄

会話：「次にできるようになりたいこと／感想」への回答

「次にできるようになりたいこと／感想」の回答は、「流暢さ」「自然な日本語、話し方」「内容、説明の仕方」「文法、発音、語彙」などに関するコメントが見られた。

(学習者の回答の表記のまま抜粋)

〈流暢さ〉

I もっと話のスピードを上げたいです。

J もっと流暢に話したい。

〈自然な日本語、話し方〉

A 話す時、日本人ではないことがバレないようにしたい。

L 何気なく異性に話しかけられる。

〈内容、説明の仕方〉

K もっと大声で、自信があって、おもしろいことを紹介したい。

B 次にはもっとうまく説明できるようになりたいです。

E 詳しいことについてうまく説明できるように。

〈文法、発音、語彙〉

D 文法を正しい使いたい。

F 文法を正確に使うこと。

G 文法を正確に使えるように。

N もっと適切な文法を使って、もっときれいな発音で話したい。

M もっと発音をはっきりしたいです。

P もっと日本人みたいに発音できたらいいと思う。

H 自分が話すとき、知らない単語が多かったので単語を覚えたいと思います。

〈感想〉

O 話し言葉を勉強しないと、日本人のクラスメートと会話することが難しい。

C 非常に日本語の勉強に役立つ練習です。

### 【ディベートのふり返りの結果】

ディベート：目標の達成度に関する質問と回答

ディベートのふり返りは「セルフチェックシート」で行った。この「セルフチェックシート」は『知のナビゲーター』の169ページを一部改訂したものである。ディベート目標の達成度に関する質問が6つあり、各質問に対し自己評価を5段階で行い、コメントを書くようになっている。本報告では、質問とコメントに絞って見ていくこととする。表1に質問内容と学習者

の回答を示す。回答は内容によって4つに分類した。肯定的なコメント（できた、うまくいった等）、否定的なコメント（できなかった、うまくいかなかった等）、ふつう／あと少しといったコメント、コメントなしの4つである。数字は人数を表している。表1を見ると、1.～5. への回答は「否定的」なコメントより「肯定的」なコメントのほうが多いことが分かる。

表1. ディベート目標の達成度に関する質問と回答

質問	肯定的	否定的	あと少し ふつう	コメント なし
1. チームで協力できたか	12	3	0	2
2. データ収集はうまくいったか	8	4	2ふつう	3
3. 主張の作成はうまくいったか	9	2	1あと少し	5
4. うまくプレゼンテーションできたか	5	4	1あと少し 2ふつう	5
5. うまく反論できたか	7	3	1あと少し 1ふつう	5
6. 時間配分はうまくいったか	4	6	2あと少し	5

#### ディベート：「反省と感想」への回答

「反省と感想」の回答であるため、反省点を多く書いているが、肯定的なコメントや今後に向けて前向きなコメントも見られた。そして、反省点も具体的なものが多い。「できなかった」という内容の否定的なコメントのみ書いた学習者は1名のみであった。以下にコメントの詳細を示す。A～Qは調査協力者の17名を表している。

(学習者の回答の表記のまま抜粋)

#### 〈肯定的なコメント〉

C 今回のディベートの経験は非常に日本語の勉強に役立つ気がします。自分の頭の中にあつたことをスムーズに人の前で日本語で表すのはいかに難しいかと感じました。

E わたしが完璧だ。だから反省なし！

H おもしろかったです。(コメント前半抜粋)

#### 〈今後に向けての前向きなコメント〉

F いろんな不足がある。提昇しなければならない。

G よく準備しようとするために、時間の把握がよくないから、もし次回があれば、がんばります。(コメント後半抜粋)

I 今回は初めてのディベーターなので、流暢などの事はまだ慣れてなくて、いくつかの不足がありました。今度機会があれば、もっとよいディベーターを作れると思います。

J チームでの分担と協力はよくできた。しかし、今度主張の内容はもっと詳しく調べて、具体例などをもっと出したいと思う。

M 次にはデータをうまく整理して発表したいです。(コメント後半抜粋)

## 〈具体的な反省点を挙げたもの〉

- A 反論の内容と根拠がもっと多い方がよいと思う。
- B 声が意外と小さかったところは直すべきだと思います。
- D ディベーターは自分だけ努力することは無理です。チームのメンバー全員の間での交流は重要だと考えます。
- G 今回のディベートは私の初めてですから、すこし緊張して、発音がずれていたところもありました。しかも、よく準備しようとするために、時間の把握がよくないから、もし次回があれば、がんばります。
- H おもしろかったです。どのくらいディベーターは進んだが、できなかった部分もある。準備不足で論理的な部分が足りなく、感情的な部分もあったのではないかと思います。
- K ディベートの際に緊張したんですが、もっとゆっくり話せばよかったと思った。相手の表現はよりよかった。相手にいろいろなことが学べると思った。
- L もしも、準備できる時間をもっと多かったら、リハーサルとかをしておくべきだと思います。
- M 今度の問題はやはりデータのまとめ、つまり、構成にあると思います。内容に少し、不足なところもあったし、よくまとめてなかったと思います。次にはデータをうまく整理して発表したいです。
- N 反論について、もっと否定側の内容をちゃんと考えた方がいい。
- O 発表前にいろいろな資料を調べて、反論を担当する人がいなくても反論できてよかったです。
- P もっと考えをまとめて言ったらよかったと思う。

## 〈否定的なコメント〉

- Q 準備はしたけど、色々考えてもうまくまとめなかったのが、よくできなかったと思います。

## 4. 考察

### 4.1. 授業全体のふり返りアンケート結果と項目別ふり返りからの結論

まず、項目別ふり返りのコメントを目標達成度の観点から考察する。続いて、授業全体のふり返りアンケート結果と比較し、授業の目標達成度と授業の満足度の関係を考察する。

授業全体のふり返りで「よかった、やりたい、やったほうがいいと思うもの」として回答が多かったのは「会話」である。3.1.2.の「会話のふり返りの結果」で「できたところ」への回答を見ると、16名中11名が「会話全般がうまくできた」、4名が「会話の目標が達成できた」という内容のコメントを書いている。そして、「次にできるようにになりたいこと／感想」の回答には2名が「流暢さ」、2名が「自然な日本語、話し方」、3名が「内容、説明の仕方」、7名が「文法、

発音、語彙」に関する内容に触れている。これらの結果から、ほとんどの学生が会話の目標を達成したと感じ、さらに、目標より一歩上を目指して具体的な目標を掲げていることがわかる。これは、学習者の大部分が会話授業に対して「できた」という満足感が得られ、次の具体的な目標に向かっていく意欲へつながったと推測できる。一方、「よくなかった、やりたくない、やらないほうがいいと思うもの」として回答が多かったのは「ディベート」であり、振り返りのコメントを見ると、「目標が達成できなかった」という趣旨のコメントが「会話」より多く見られた。目標達成度と満足度の観点から「会話」と「ディベート」のコメントを考察すると、目標達成がされるほど、学習者の満足度が高くなることが考えられる。

#### 4.2. 問題点に対する結論

ディベート授業は会話授業より目標達成度が低く、これが授業の満足度が低いことの原因の1つであると考えられる。しかし、学習者の振り返りの詳細を見ると、満足度に影響を与えたのは目標達成度だけではないと推測される。3.1.2. で述べた、ディベート授業の目標達成度に関する6つの質問中5つで、肯定的なコメント（できた、うまくいった等）のほうが否定的なコメント（できなかった、うまくいかなかった等）を上回っている。そして、振り返りの「反省と感想」の回答を見ると、ディベートに関して肯定的なコメントが3名、今後に向けての前向きなコメントも5名見られる。その他の12名も「できなかった」というだけのコメントではなく、授業目標に関する具体的な反省点を書いている。このように、ディベートの振り返りでは、否定的なコメント（できなかった、うまくいかなかった等）はあったものの、肯定的なコメント（できた、うまくいった等）の方が多く、学習者が目標達成できなかったわけではないことがわかる。加えて、反省点では授業目標に関する内容を書いている学習者が多いことから、目標を意識しながら学習していた状況も推測できる。実際、授業の様子やディベートの結果から考えても、ディベートの目標を十分達成していた学習者が多かったと言える。

では、なぜ多くの学習者が目標を達成したにもかかわらず、やりたくないといった回答が多かったのだろうか。振り返りのコメントを学習者の期待の観点から考察する。3.1. の会話の振り返りのコメントを観察すると、学習者は「実生活で使える会話の運用力」を目標として期待していたことがうかがえる。3.1.1. で会話がよかった理由として、「2. 日常生活に関する会話をやりたいと思います。」、「3. 日常生活で使われる会話はよかったです。」、「4. 友達の間話し方や今後就職するとき上司との間の話し方をやりたい。」というコメントが見られた。また、3.1.2. の「次にできるようになりたいこと」の回答では「流暢さ」、「自然な日本語、話し方」、「正しい文法と発音」、「日本人みたいに話す」、などの内容を挙げている。会話の感想として、「O話し言葉を勉強しないと、日本人のクラスメートと会話することが難しい。」という学習者もいる。授業での目標を考えても、テーマに沿って実生活で使える会話ができることを目指していた。そして、目標を達成するための練習を繰り返し自然な会話に近づけた。会話授業では、学習者が期待する「実生活で使える会話の運用力」が達成できたことで、満足度につながったと考えられる。

それに対してディベートでは、学習者の期待と目標が合致しなかった可能性がある。ディベートは現在の学習者の日本語能力から考えると、かなりハードルが高く授業時間も限られていたため、最終目標 (goal/aim) は言語運用力より、ディベート形式の経験に重きを置いた。そのため、授業内では即座に日本語で自分の意見を表現する力をつける練習はできなかった。しかし、学習者が期待していたものは「相手の意見を理解し、自分の考えを即座に表現する運用力」であったのかもしれない。実生活でディベートそのものを経験することは少ないため、ディベートの勉強を期待する学習者は少ないようであった。しかし、会話授業で求めていたものと同じように、相手の考えを理解しながら自分の考えを表し、話を進めていく力には興味を持った可能性がある。3.1.1でディベートがよくなかった理由として、「5. 資料を読むだけでは日本語能力を伸ばせないとします。」という回答があった。また、3.1.2. のディベートの反省と感想で、肯定的なコメントのなかに、「C 今回のディベートの経験は非常に日本語の勉強に役立つ気がします。自分の頭の中にあったことをスムーズに人の前で日本語で表すのはいかに難しいかと感じました。」という回答もあった。この2つの回答からも、「自分の考えを即座に表現する運用力」を期待していた可能性が高いと考えられる。

## 5. 次回のディベート授業の主な修整点

3.1.1のディベートが「よくなかった、やりたくない、やらないほうがいいと思う」理由で、「3. 現段階で自分の考えを表すのに精いっぱいなのに、論理的にディベートすることはまだ早いです。つまり、レディネス待ちが必要だと思います。」という意見があった。このように、ディベートという形式での練習は、学習者の方からも時期尚早という声があったが、やり方によっては、ディベートという形式も有効に思われたので、その進め方についてもまとめる。

今回の学習者の状況を考えると、「自分の意見を言うことが精一杯」という状況であった。会話での練習のように、段階を追った練習が必要であったと考えられる。ディベートで求められる「議論の流れの中で即座に反論するという即時性」という要素については、ハードルが大変高いことを考えて、ディベートの一手手前の形式である、「相手の主張に反論する運用力をつける」ことを目標にする。手順は、①意見を聞く、②理解をする、③反論をする、という3段階を考える。ディベートと同じように、3人～4人チームで、①～③までのそれぞれの段階で時間を十分にとり、話し合いや教師からの確認の時間も入れて、各段階で力がつくように進めていく。具体的には、「①意見を聞く」ときは意見を言うときの日本語表現や語彙、構成の確認、メモをとりながら相手の意見を聞く。続いて、「②理解をする」場面では、メモの内容を見ながらチームでお互いに自分の理解を確認し合い、相手側の主張のどの部分に反論するか決定する。最後の「③反論をする」場面は反論内容と構成をチームで話し合うことで作り上げていき、決定する。その後、反論の表現を確認しながら、日本語で反論ができるように練習をする。これらの段階を追った練習を何度か繰り返した後、ディベートの流れで、即座に反論をする練習に移る。このように、

「運用力」を中心とした目標で授業を行えば、今回の学習者には有効だと思われる。

学習者が求めている「言語運用力」は現在の言語教育ではほとんどの学習者が期待する力だと思われる。学習している言語で意思疎通をすることで、「できた」という感覚を持てるようになるのであろう。学習者の期待は、学習の動機づけと強く関係すると考えられている (Dörnyei & Ushioda 2011)。様々な視点から目標設定を考えなければならないが、この「言語運用力」を優先順位として上に置くことは学習者の満足度を上げ、学習意欲向上のための重要なポイントだと思われる。

## 6. おわりに

授業を行うに当たって、教育が行われる状況を注意深く観察して、実現可能で具体的な目標を立てることは、効果的な学習のために必要である。本報告では、授業の目標達成が授業の満足度に繋がる結果が見られた。しかし、学習者のコメントをさらに詳細に考察した結果、目標達成だけでは満足度にはつながらないことが推測され、学習者の期待するものと目標が合致することの重要性が想起された。大学側で策定された教育項目であるディベート形式での学習は、学生側も経験してみてよかったという前向きなコメントも見られたが、この形式での学習の難しさを多くの学生がコメントしている。このような状況で、現場レベルで出来る学習方法の微調整は、学習者の意欲向上や授業の活性化に有益と思われる。

教育現場の状況は様々な要因が影響を与え合い、変化している。状況の変化によって目標も変化していく。Richards (2001) が述べているように、学習者状況を常に観察しながらカリキュラムを修整していくことは効果的な学習のために必須と言えるだろう。今後も学習者の視点に立つことを忘れずに、効果的な学習を考えながら授業に臨みたいと思う。

### 参考文献

- 鎌田修 (監修)・奥野由紀子・金庭久美子・山森理恵 (2016) 『生きた会話を学ぶ中級から上級への日本語なりきりリスニング』 ジャパンタイムズ
- 中澤務・森貴史・本村康哲 (編) (2007) 『知のナビゲーター：情報と知識の海——現代を航海するための』 くろしお出版
- Dörnyei, Z. & E.Ushioda (2011). *Teaching and Researching Motivation* (2nd ed.). Harlow: Pearson Education Limited.
- Richards, J.C. (2001). *Curriculum Development in Language Teaching*. Cambridge, New York: Cambridge University Press.

最後に、授業のご相談をさせていただいたコーディネーターの嶋原耕一先生にお礼申し上げます。

資料1. 3.1.1. 授業のふり返しアンケート

勉強したこと

話す練習

- ① 短いスピーチ： 自分の街
- ② 会話： 聞きたいことを聞く（例：バイトの話、町の話など）
- ③ 発表「～べきか」
- ④ ディベート

聞く練習

- ⑤ ニュース
- ⑥ 会話、発表、ディベートで相手の話していることへの理解

複数回答可

Q1 よかった、やりたい、やったほうがいいと思うのはどんなことですか。どうしてですか。

Q2 よくなかった、やりたくない、やらないほうがいいと思うのはどんなことですか。どうしてですか。

---

資料2. 3.1.2. 会話のふり返し

聴解会話ふりかえり

名前（ ）

1. 難しかったところ
2. 分からなかったところ
3. できたところ
4. 次にできるようにになりたいこと／感想

資料3. 3.1.2. ディベートのふり返り

セルフチェックシート (ディベーター)

年 月 日

氏名： \_\_\_\_\_

論題： \_\_\_\_\_ (肯定側・否定側)

チェックポイント	自己評価	コメント
チームで協力できたか		
データ収集はうまくいったか		
主張の作成はうまくいったか		
うまくプレゼンテーションできたか		
うまく反論できたか		
時間配分はうまくいったか		
(採点基準：5 = とてもよい、4 = よい、3 = 普通、2 = わるい、1 = とてもわるい)		

反省と感想

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

学籍番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

中澤・森貴・本村編 (2007) 『知のナビゲーター』 p169. を一部改訂